

● 読書感想文コンクール 中学校の部 ●

入選 内手 明 (うちであきら) 桜田中 2年生

作品名：「ダレン・シャン」を読んで

図 書：ダレン・シャン

周りにはたくさんの友達や家族がいる。そして、この本を読み終えた今それらの存在が昔とは違って見える。深さが増し、言葉では表せない程に、大切だと認めざるを得なくなった。

「人は大きな力など持っていない。支え合い、共に生きることで初めて人生を送る事ができる。」随分と前に聞いた言葉。これは僕の心を響かせた。そのきっかけとなったのはおそらく小学四年生の頃だろう。当時の自分は夏にサッカーの合宿に行った。友達と楽しく過ごし、助け合い、そこで知った友達の大切さ。また、成長していくにつれていつも自分のことを考えていてくれる親への感謝の気持ちが積み重なっていった。だから、これらが重複する月日が経った今、この一文が胸にじんわりと染み込んだのだと思う。

この点からして主人公の行動には驚かされることばかりである。主人公のダレンは、ごく普通の少年だった。歳はちょうど僕と同じ。しかし、彼は物語序盤に人生最大といつていいく程の決断を迫られる。簡単に言えば自分の人生を捨てるか友達の命を捨てるか、というもの。僕ならこんな決断は下せない。もし考えたとしてもその果てに「人生を捨てる」と、口から出てくるのだろうか。いや、それは絶対ない。友達は他にもできるし、十四歳の自分の将来を考えると、口が裂けてもそんなことは言えない。ひどい様だが、欲の塊と言われる人間としては妥当だろう。しかし、ダレンは違った。少しほためらったが、その答は「自分の人生を捨てる」だった。それは彼の意志によって答えられたのかと思ったが、読み進めていくうちに何か運命が感じられた。それほど冷たくはないが、何処かに悲しみを秘めているようなものが。

ダレンの運命は悲惨なものだった。友達の命を救ったのと引き換えに彼がなったのは闇の生き物であるバンパイア、いわゆる吸血鬼。動物の血を飲まなければ生きていけない悲しい生き物。

それから数日間は学校に通った。はじめの方は何も起こらなかったが、ここでも悲しき運命がダレンを襲う。見た目や行動が少しづつ変わっていくダレンをクラスメートは避けるようになってきた。ついには、命を救った友達にも見捨てられる。ここで、ダレンからはツンと完全に断たれた。「友達」という糸が。この時のダレンの気持ちは人生経験の少ない自分でも分かる。

身近に潜む恐怖ほど恐ろしいものは無い。こんなことをを考えているとゾクゾクとした不安にかられてくる。さらに、実際に体験しているダレンのことを想像すると、同情の気持ちまでいつしか胸の底に芽生えていた。

しかし、僕がいくら願っても運命は変わらない。友達がいなくなったダレンは家族を意識するようになった。だが、そんな心とは裏腹に闇の生き物の心が表に出てくる。ダレンは無性に血が飲みたくなってきた。そう、家族の血を。それはバンパイアの定めであり、仕方ない事。血を吸われても、その人がまたバンパイアにならないことをダレンは知っていた。だが、飲めなかつた。感情に任せたら血を飲み干して殺しかねないし、それ以前にそんな自分を許せなかつたのだと思う。そして、ダレンは誓った。家族との関係も断ち切る事を。

このように彼が自分との関係を無理にでも無くしていったのは、今までに築いてきたものを一つ、また一つと壊していくことで、全てをリセットしたかったのかもしれない。実際にこの決断の後、ダレンは人間とは馴れ合わない虚しい生き物として生きていったのだから。

このあとも物語は続くが、決して悲しい話ではないと思う。どんな時も道を切り開けるダレンの強い精神、ダレンを想う家族の気持ち、これらがあつたから重い内容でも、読み終えたら清々しい気持ちになれたのだと思う。

去年三月、日本では大震災があった。その被害は凄まじいものだった。家族が死んだ、家が全壊した、生きていく望みなんて無い、と思った人は少なくなかつたことだろう。自然の気まぐれなんかによって生きていけなくなる人間は無力だ、と心が泣き崩れた。けれども、諦めた人なんていなかつた。被害を受けた人も受けなかつた人も力を合わせた結果、見事多くの場所は復興に成功し、人の団結力が深まつたことは言うまでもない。人と人がつながれば、不可能を可能にしてしまう。物語の中に入れれば、このことをダレンに伝えたかった。

身の周りに大切な人がいる。考えてみればとてもありがたいことである。これからは、このことを胸に刻み、進んでいけたらいいなと思う。そして感謝したい。いつも助けてくれる友達に。自分を育ててくれた親に。